

彼女は小悪魔メイド

著者／流遠亜沙
イラスト／ポイズン

ASSAULT-SYSTEM 文庫

「——おかえりなさいませ、ご主人様！」

帰宅するなり、そんな言葉で出迎えられた。

俺の家には親戚の三姉妹が同居しており、家に帰れば誰かに『おかえりなさい』と言われる事はある。

しかし、俺は『ご主人様』ではない。メイドを雇った覚えもない。

当然だ。うちは大富豪でもなんでもなく、ごく一般的な家柄だ。メイドを雇う金などないし、メイドを雇わねば生活が破綻はたんするような状況でもない。同居している三姉妹の次女・タオエンは人格に問題はあるが、家事に関してはプロ級だから。

そもそも、この国における『メイド』とは特殊な存在だ。本来は『侍女』『家政婦』『使用人』といった、要は『お手伝いさん』なのだが、近年では『コスプレ』の代表的なジャンルとなっている。『メイド喫茶』という商売が成立し、アキハバラに行けばメイドがビラ配りをしている。聞くところによると、メイドがいる居酒屋やキャバクラ、果ては性風俗店まであるらしい。

だが、ここはアキハバラの路上ではない。俺が開いたドアは、間違いなく俺の家のものだ。某・猫型ロボットの出す『どこへでもつながるドア』のごとく、空間がねじ曲がってしまった、俺の家のドアの先がメイド喫茶に準じるところかの店につながったのならともかく、いや、そんな馬鹿な話があるはずがない。冷静になれ。

目の前にいるメイドは、同居している三姉妹の三女・ベアトリーチェだ。

中学一年生——現時点では小学六年生だが——らしく、見た目は小柄で、容姿も幼い。仮にベアトリーチェのそっくりさんだとしても、明らかに義務教育を終えていないだろう。労働基準法に引っかけ、その手の店では働けない。

いや待て、つながった先が並行世界や異世界だったらどうだろう。この世界とは労働基準法が違うだろうから、彼女の年齢でも働けるかもしれない。

「……どうしたの、お兄ちゃん？　なんか難しい顔して黙りこんで」

目の前の少女の言葉に『別人説』が駆逐された。俺を知っているという事は、彼女は間違いなく俺の知っているベアトリーチェで、ここは俺の知る俺の世界で俺の家だ。

ならば他にどんな可能性がある。俺が忘れていただけで、ベアトリーチェは普段からメイド服で『おかえりなさいませ、ご主人様』と言っていたのか？　それとも『ドッキリ』の類たぐいで、俺を驚かそうという趣向か？

……判らない。

可能性はいくらでも挙げられるが、検証する術すべがない。

3 彼女は小悪魔メイド

「……どうしたんだ、その服」

考えるのが面倒くさくなつたので、俺は率直に訊いてしまう事にした。

「えへへ。びっくりして声も出なくなるくらい可愛い？」

そう言つと、メイド服を身にまとつたベアトリーチェがくるとその場で回つて見せた。エプロンドレスがひらりと翻る様は、なるほど、可愛い。男というのは単純なもので、スカートが風になびいたりすると、無意識に視線を向けてしまう生き物なのだ。

「どうどう？ メイドさんっほい？」

俺は特にメイド好きという訳ではないので、何をもつて『メイドさんっほい』というのかは判らないが、恐らく褒めてほしいのだろう。期待の眼差しを向けられているのは判る。

「あ……可愛いんじゃないか？ 似合つてると思つぞ」

下手な事を言つと機嫌が悪くなるし、実際、良いと思つてしまつたのは事実だ。だから、思つたままに感想を口にした。

「本当!? ありがとう、お兄ちゃん！」

感極まつたのか、ベアトリーチェに抱きつかれてしまう。メイドを意識していたのか、先ほどまでは多少、彼女にしてははおらしく振る舞っていたようだが、付け焼刃は長持ちしない。

「お、おい。くつつくな、離れる」

「やだ」

俺の背中に回した腕に力を込め、メイド服の少女が顔を擦り寄せてくる。身長差があるため、胸のやや下辺りにくすぐったい感触。ほんのりと香るのはシャンプーの匂いだろうか。同じものを使っているはずなのに、まったく別の香りに感じる。

「——お兄ちゃん？」

ベアトリーチェの声に、はつと我に帰る。心の声が聞かれてしまつたのかと、妙に焦る。

「……なんでもない。それより、質問に答えてないぞ」

ポーカーフェイスを維持して話を逸らす。

だが、ベアトリーチェが一瞬見せた意味ありげな表情から察するに、俺の目論見は見抜かれていたのかもしれない。この少女は見た目の幼さとは裏腹に、妙にあざといというか、それでいて達観しているところがある。長女のヤミヒメよりも、ある意味で大人びていて、年齢に似合わぬ精神性に少し不安になる時があるくらいだ。

「あのね、バイトする事になったの」

そんな俺の内心などよそに、ベアトリーチェが無邪気に言った。ちなみに、また抱きつかれたままだ。

「バイト……?」

非常に不安を煽る言葉だ。最近では学生でもアルバイトをするのは珍しくない。だが、メイド服を着てするバイトとは何だ? そもそも、ベアトリーチェの年齢でバイトは出来な
いはずだ。

「あ、大丈夫だよ。いかがわしいバイトじゃないから」

俺の表情から察したのか、先回りするかたちで否定の言葉が出た。

「それに、お金をもらう訳じゃないから、そもそもバイトじゃないし」

まったく話が見えない。

「つまり……どういう事だ?」

「えっとね、知り合いの管理人が趣味でやってるお店みたいなのがあって、そこでお手伝いをするの。看板娘なんだよ」

ふつふつと疑問が湧く。知り合いとは誰だ? 店の手伝いをするのに金銭が発生しない

のか? 何より――

「なんでメイド服なんだ?」

「管理人の趣味だって」

よし、通報だ。

「ちよつと、なんで携帯出すの!?! どこにかける気!?!」

「離せ、ベアトリーチェ! 脅迫か? 弱みを握られてるのか?」

「そういうんじゃないから! 犯罪とかじゃないから!」

「こういう時こそ国家権力の出番だろ! 何のための公僕だ!」

携帯電話を奪い合いつつ口論を交わすという、無駄に体力を使う行為を数分ほどした。

ベアトリーチェの話聞くに、ヤミヒメとタオエンも知り合いらしく、『手伝い』とやら

は三人で行うらしい。詳細は後から二人も交えて聞くとして、タオエンが了承しているなら問題は無いのだろう。あいつが詐欺の類に引掛かる事はないだろうし、脅迫する事はあっても、される事はないと思う。

「もう。お兄ちゃんって意外と心配性だよな」

「お前の話だけ聞いたら、誰でも犯罪臭がすると思うぞ」

年端もいかぬ少女にメイド服を着せる管理人がやる店――うん、いかがわしい匂いしかない。メイド喫茶のオーナーは商売でやっているだけで、別にメイド好きという訳ではないだろうが。

そもそも、この国におけるメイドというものに対してのイメージがおかしい。どうしても『お手伝いさん』とは一線を画しているというか……。

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

ソイエス
ZS 〈ツイドチック・ストラテジー〉『彼女は小悪魔メイド』をお届け致します。

バレンタイン話に続き、視点はアサトですが、今回もベアトリーチェのお話です。先日、このサイトが一周年を迎え、その際にポイズンさんから戴いた記念イラストを基に書いてみました。

劇中の時期で言うところと三月です。四月から中学生なので、まだJSです(笑)。『ZS』はネタがあれば書くというコンセプトで、時系列が掲載順と一致しないのは悪しからず。ちなみに、劇中で言っている『看板娘のバイト』というのは、もちろんこのサイトでの事を指します。戴いたイラストがメイド服だったので、それに絡めた話にしようと考えた結果、看板娘をやる前日譚となりました。

それでは謝辞を。

まずはイラストくださったポイズンさんに感謝を。ありがとうございます。タオエンに続き二人目ですね。これは是非とも長女もお願いしたいです。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。次の機会がいつになるかは判りませんが、もし『ヤミヒメのこんなシチュエーションが見たい』というのがあれば、リクエスト次第で叶うかもしれません。もしあれば、ご一報ください。

——ベアトリーチェは本当に、あざと可愛いです。

2015/4/13 流遠亜沙

アンケートに答える

ポイズンさんのブログ『AQUA PALACE』に行く

『ZS ツイドチック・ストラテジー』ページに戻る